
三つ編みミウと、きれいなよっちゃん

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三つ編みミウと、きれいなよっちゃん

【Nコード】

N7264J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

主人公ヒロは、村上ミウと幼馴染。彼女の親友のよっちゃんに、ある日ヒロは告白されて　？　青春短編小説

「ヒ口っ。ちよつと待ってよっ」

歩き出した僕の背中に、美羽の焦る声がかかる。僕は足を止めて、振り返り、しょうがないなあとばかりにつぶやく。

「早くしてよ。遅刻しちゃうよ」

「ごめんごめん」

美羽は口に食パンをくわえたまま、家の鍵を締めて、小走りに、ぴよこぴよこ三つ編みの髪をはねながら門から出てくる。

僕は彼女が隣に並ぶのを確認すると、歩き出す。美羽は食パンを手に持ちかえると、それをかじって、口をもごもごとさせる。うっすらと美味しそうな顔を浮かべる。

僕は懷から単語帳を取り出し、それを見つめながら黙々と歩く。

「なあに、また勉強？」

美羽が、僕の顔の横から覗き込んできく。近くに美羽の顔があり、美羽のどこか甘ったるいような、けれど彼女らしい、気分を落ち着かせる匂いが漂ってきた。

僕は美羽から遠ざけるように、単語帳を反対の方向へ持っていき、体を脇へ向かせる。

「いいだろ、別に。また、がり勉とか言ったら、今度こそ美羽を置いていくから」

すると、美羽は焦ったような表情を浮かべて、口の中にあつたものをごくりと飲み干すと、すぐに喋り出す。

「そんなこと言わないよ。だから、置いて行くのはナシっ」

僕はそんな美羽をちらりと見て、依然と口を尖らせたまま言う。

「美羽も、勉強しといた方がいいよ。英単語のテストって一番成績に加算されやすくて、都合が良いんだ。今のうちにポイントを稼いでおくチャンスじゃないか」

美羽は、興味がなさそうに「そうね」と返す。

そのまま歩いていると、道の先からこちらに手を振って近づいてくる一人の女子高生の姿を認めた。美羽が、「よっちゃん！」と食パンに噛みついたまま嬉しそうにつぶやく。

僕は、近づいてきて僕の隣に並んだよっちゃんに向けて、「おはよう」と軽く頭を下げる。

よっちゃんは僕に明るい笑顔を返してきて、「おはよ」と返す。

よっちゃんは、僕たちと同じクラスの女子高生で、美羽とは親友の間柄にある。幼馴染で腐れ縁な僕たちと仲が良く、一緒にいることが多い。

よっちゃんは、茶色のロングストレートの髪を柔らかく払いながら、ぱつちりとした目を僕たちに向けてきて、「ねえ」とつぶやく。「今日の英単語のテスト、大丈夫そう？」

僕はよっちゃんの整った顔を見返して、今話してたところ、とつぶやく。

美羽は、食パンの最後のひとかけらを飲み干すと、僕の背後を迂回して、よっちゃんの隣に並んだかと思うと、いきなり彼女に抱きついた。

「こら、美羽！」

よっちゃんが、体を抱きしめてくる美羽の細い腕を取り払おうとしながら、照れ臭そうに言う。美羽は、よっちゃん、よっちゃん、と息切れた声で不気味につぶやきながら、すりすりと彼女の頬に自分の頬をこすりつける。

僕はいつものことなので、別段気にせずに、再び単語帳に目を落す。

「やめなさいってば！」

いい加減に痺れを切らしたよっちゃんが、美羽の肩をつかんで、無理やり体から引きはがした。美羽は、唇を尖らせて、キスを迫りながら、必死によっちゃんにしがみつこうとしている。

僕も、よっちゃんが気の毒になって、片手をのばして美羽の顔を掴むと、それを無理やり後ろに押しやって、よっちゃんから遠ざけ

た。

美羽は僕の手の圧迫を受けて、顔をのけぞらせながら、うぐうぐと唸っていたが、やがて観念したように身を引いた。

「まったくつれないなあ」

美羽は残念そうにつぶやいて、おとなしくよっちゃんの横に並ぶ。その手がちゃっかりよっちゃんの手を握っているのに気づき、僕は息を吐く。

「何よお、その呆れたような顔は」

美羽がよっちゃんの腕にがしつとしがみつकिながら、口を尖らせる。

「別に。美羽も、相変わらずだなあって思ってたさ」

そう言って単語帳のページをぺらりとめくる。

よっちゃんは僕の単語帳を覗き込み、

「律儀に単語帳にまとめてるのね。偉いわね」

と言う。よっちゃんの端正な顔が間近にあり、頬によっちゃんの吐息がかかってきて、僕はどぎまぎしてしまう。よっちゃんは美人だ。学年の男たちの間で人気がある。それもあって、よく一緒にいる僕に向かって、男友達が詰め寄ってくるということがある。迷惑な話だが、密かに僕もよっちゃんの近くにいろことをラッキーだなあと思っていたりもして、奴らの悪口を言える立場でもない。

「ねえ。問題を出してみて。私答えるから」

よっちゃんが単語帳の前で伏せていた顔を持ち上げ、上目づかいでそう言ってきて、僕はしどろもどろになりながら、「うん」とつぶやく。

美羽が、私も私もと話に参加したそうだが、勉強してない美羽が答えられるはずがない。

しょうがないので、美羽が問題を出す側となり、僕は美羽に単語帳を手渡す。美羽は指定されたページを開き、そこに書いてある単語を読み上げる。

「ゴヴェアンメント」

美羽は眉をしかめて、気難しそうな顔で単語を読み上げる。

「ガヴァメントじゃなくて？」

「そうそう、がヴぁめんと」

美羽は、あはは、と乾いた声を上げる。駄目だ、こりゃ。

「私が代わるよ」

よっちゃんが、苦笑しながら、美羽から単語帳を受け取る。美羽は、不貞腐れたように頬を膨らませている。美羽、撃沈。

「じゃあ、メジャー」

僕は即座に「手段、尺度」と訳を口にする。その速さに、美羽が一層不機嫌そうに僕を見つめる。

「それじゃあ、次は……」

そうこうしているうちに、正門に着いた。

「うわーん、全然できなかったよお」

美羽が、さほど気にしてなそうなその顔で不釣り合いな言葉を吐く。美羽は後ろの席に座っていたよっちゃんの首根っこに飛び付く。よっちゃんは幼子をあやすように、よしよし、と美羽の背中をなでる。僕はというと、単語帳を開いて、行っただけの単語テストの採点をしている。

「よっちゃんはできた？」

美羽は少し身を引いて、よっちゃんと顔を向かい合わせて、そう訊く。

「うん。一応」

よっちゃんは変わらぬ笑顔でそううなづく。

「すごおい、よっちゃん」

そう言って、理由もなくがばつと抱きつく美羽。

僕はというと。よしとガッツポーズを作って単語帳を閉じる。満点だ。

昼休みに入り、生徒が席を立つ中、僕も席を後にしようとする。その時。

「ヒロ君。ちよつといい?」

よっちゃんが美羽を引きはがして、席を立つ。

「何?」

「一緒に屋上でご飯食べない?」

よっちゃんは胸の前で指を組み合わせて、視線をめぐらせながら言う。

いつも僕は教室で男友達と食っているから、よっちゃんの申し出は意外だった。

「いいけど」

そう言つと、よっちゃんはほつとしたような表情を浮かべて、

「あのね、いつもヒロ君、購買でパン買ってるでしょ。今日私、お弁当作つて来たんだ」

僕は嬉しい気持ちになり、頬を緩めて「そうなんだ」とつぶやく。よっちゃんの手料理、まさか食べれるとは。

「いい」

そう言つて、よっちゃんは僕のワイシャツの腕袖をつかみ、教室を出ていこうとする。

僕は取り残された美羽を振り返り、「美羽は?」とつぶやく。

美羽はどこか違う方向を見つめていた。美羽にしては珍しい、無表情の顔をしていた。美羽は黙つて首を振った。

僕はよっちゃんに促されるままに、屋上に来た。

日差しが暖かく降り注ぎ、ほんわかと体を包み込む。その暖かさが風によつて揺らぎ、今度は横から涼しげな風が吹きつけてくる。

僕はよっちゃんと一緒に隅の方に行った。よっちゃんはレジャーシートを持って来たようで、青いそのシートを屋上の角の辺り一面に広げた。

「どうぞ」

よっちゃんが指でシートを指し示すので、僕は靴を脱いで「おじやまします」と上がる。

よっちゃんはどこか嬉しそうな顔で、風呂敷を解いて、重箱を出

し、段をひとつずつ取って並べる。

割り箸と紙皿をよこしてきて、僕が何もせずにはかんとしていると、「どうぞ」とにこやかに重箱を勧めた。

重箱には、色鮮やかなよっちゃんお手製の料理が敷き詰められていた。僕は海老フライを一つ取ると、かぶりつく。よっちゃんがそれをじっと見つめてきて、僕は一口飲み干すと、大きくうなずいた。「おいしいよ、よっちゃん」

その言葉に、一瞬嬉しそうな顔を浮かべて、けれどそれをすぐに苦笑いに変える。

「よっちゃんってその呼び方……」

「ああ、ごめん。好美ちゃん」

僕は慌ててそう言いなおす。よっちゃんは美羽には許しているけれど、その呼び名が好きではないらしい。前に美羽と一緒にそう呼んで、注意されたことがある。

よっちゃんはどこか赤くなったその顔を俯かせて、ハンバーグを一つつまむ。

「好美ちゃんってさあ、美羽とどこで知り合ったの？」

もぐもぐとおにぎりを食べながら言う、僕。

「私、受験の時に、美羽ちゃんと隣同士の席だったの」

よっちゃんは、どこか懐かしげ。

「その時に、美羽ちゃんが話しかけてきたの。カンニングするの見逃してくれてテストやる前に頼まれてさあ。冗談だと思ったんだけど。美羽ちゃん、すごく必死そうだった」

おいおい、何やってんだ美羽。

「結局許さなかったけど、そんなこと」

「美羽の奴、中学三年の時、勉強しないで小説ばかり書いてたんだよ。それでテストの一カ月前になって、慌てて勉強しだしてさあ」僕は当時のことを思い出しながら、あきれ顔でしゃべる。

「ヒロ君は、美羽ちゃんとどのくらい前から一緒にいるの？」

「幼稚園の時からだよ。両親同士が仲良くってさあ、よく家族ぐる

みで付き合ってたんだ」

「道理でヒロ君と美羽ちゃん、仲が良いわけね」

よっちゃんは楽しげにそう話す。

僕たちはそのまま屋上で優雅なお昼のひと時を味わった。教室に帰ると、美羽が、ふてくされたように机に突っ伏していた。

「怒ってる怒ってる」

美羽の背中をちょんちょんと試しにつついてみると、くるりと体を回してこちらに向き、いーだ、と歯ぐきをのぞかせて僕に牽制する。

「よっちゃんは私だけのものだもんっ。ヒロになんかあげないからね」

「はいはい」

「何よ、その、しょうがない奴だなあみたいな顔は。ヒロのその顔、大っきらい！」

いつにも増して怒っている美羽に僕は、手を差し出す。

「ほら、貸して。今日の分」

美羽は僕をじっと睨みつけたまま、机の中に手を突っ込んで、一冊のノートを取り出した。それを無造作に僕に渡す。

「今日はどこまで書いたんだ？」

僕はノートを開きながら、横目で美羽を見る。美羽は、ぽつりと「さっちゃんがみつちゃんとコンビニでばったり会う場面」とつぶやく。

僕は、四月九日と書かれたページを開くと、そこに書かれた文章を読みだす。このノートは、美羽の書いた小説が書きこまれていて、美羽は毎日昼休みになるとこのノートに書きたし始める。授業が始まる前のわずかな時間で、それを僕が読むという習慣になっている。僕はノートを読みながら、ふとよっちゃんがじつとこちらを見つめていることに気付いた。よっちゃんはどこか悲しげな表情で僕を見つめていたけれど、僕が振り向くと目を逸らした。

どうしてそんな表情をするのか、僕は気になっただけれど、そのま

ま何も言わずノートを読み続けた。

「ヒロっ。帰ろっ」

HRが終わった途端に、席を立て僕腕裾ひっぱる美羽。僕は「まあそんな急ぐなって」と机の中の教科書類を鞆に詰め込む。

「ヒロ君」

ふと声がして振り向くと、よっちゃんが腕から鞆を下げて、立っていた。

「今日さ。一緒に帰らない？」

「いいけど」

僕がそう言った時、美羽がぴたりと僕の腕を引っ張るのをやめた。そして、さっさと鞆を持って、立ち去ろうとする。

「美羽？」

僕は美羽の背中へ向けて、訝しげにつぶやく。

美羽はぴょこんと三つ編みをはねあげて振り返り、美羽らしくない、どこかうわべだけの笑顔で、

「今日は私、一人で帰るからいいや」

そう言ってさっさと教室を後にしようとする。僕はなんだか美羽の様子が気になって、「美羽」と彼女の手を取って止める。

「何。離してよ、ヒロ」

「美羽。どこかおかしいぞ。いつもなら、よっちゃんと一緒に帰りたいってせがむのに」

美羽は視線を伏せて、「いいの。今日はそういう気分じゃないの」と言っ僕の手を振り払うと、歩き出す。

「なんだあいつ……」

僕が顔をしかめていると、よっちゃんが僕の腕を引いた。振り向くと、彼女は伏し目がちに、「行こう」と言っ歩き出した。

廊下に出ると、もう美羽の姿はなかった。

僕たちはどこか沈んだ雰囲気で、学校を後にした。よっちゃんは黙ったまままっすぐ前を見て、しゃべろうともしない。くそっ、美

羽のせいだぞ。

僕は沈黙に耐えられなくて、あのさ、と言う。

「駅前に良い感じの雰囲気のカフェがあるんだけどさ。よかったら寄って行かない？」

そう言ったのと同時に、よっちゃんがヒロ君、と呼んで振り向いた。僕の言葉は遮られて、僕はじっと寄っちゃんの顔をみつめる。よっちゃんは真剣な顔をしていた。

「ヒロ君に、大事な話があるんだ」

大事な話？

僕はよっちゃんの張りつめた雰囲気に、緊張して唾をぐくりと飲む。

「私、ヒロ君のことが、」

好きなの。そうつぶやいたよっちゃんの顔を僕は食い入るように見つめた。

「え」

思考が停止して、頭が真っ白になる。

「ずっと好きだったの。私と付き合ってください」

そう言って、緊張した面持ちのまま、頭を下げた。

これ、何の冗談？ そうつぶやこうとして、よっちゃんの眼差しを見て、僕は口をつぐんだ。

よっちゃんは美羽の友達で、僕にとっても数少ない女友達で、そんなよっちゃんのことを好きだけれど、でもそれは、そっちの味の好きとは違う。

僕は顔を曇らせて俯き、あの……、とつぶやきかける。すると、その途端によっちゃんが顔を上げ、さっと腕を伸ばしてきて、僕の手を握った。

「お願い」

よっちゃんの瞳は、雫を浸らせて、潤んでいた。陽光がその雫に当たって、まばゆく輝いている。僕はこんな状況にもかかわらず、綺麗だな、と思った。

僕はよっちゃんの腕をそつと払うと、静かに言った。

「ごめん」

僕の言葉に、よっちゃんは触れた瞬間に粉々に砕けそうな表情を浮かべ、頬に涙を滑らせた。

「美羽ちゃんなの？」

よっちゃんのその目を見た途端、僕の心臓が大きく飛び跳ねた。今までに、よっちゃんが一度も見せたことがない目だった。怒りと憎しみによって、赤黒く燃えた炎が瞳の奥で渦巻いているようだった。

「美羽ちゃんなんでしょう？」

僕はそんな目をするよっちゃんに耐えられなくて、「よっちゃん」とその腕を握った。よっちゃんはその手を払いのけ、にっこりと笑った。けれど、まだ瞳の炎は消え去っていない。

「ごめんね。突然。こんなこと言って」

僕は「ううん」と首を振る。

「嬉しかったよ。ありがとう、よっちゃん」

そこで、よっちゃんの瞳がいつものように優しいものに変わり、

「よっちゃん、か」とふとつぶやいた。

「じゃあ、私ここでお別れなんだ。じゃあね」

そう言って、曲がり角の道を駆けていくよっちゃんの背中を、僕はどこか胸を締め付けられる心地を味わいながら、そつと見送った。その時、がさこそと葉が擦れる音が聞こえてきて、僕は振り向いた。道路脇の茂みが揺れ、その上にぴよこんと三つ編みの片方が載っている。

「美羽」

僕が呼ぶと、茂みの動きが突然ぴたりと止まった。僕は溜息を吐いて、茂みの近くによると、そつとその背後をのぞいた。

「何、やってんの」

茂みの後ろに座りこんでいた美羽が慌てた様子で僕をみやり、その拍子に芝生に尻もちをつく。

「これは……その……」

美羽は脇を向いて、言い訳を探すように視線をめぐらせる。僕は茂みの上にそつと腕を伸ばして、美羽に手を差し伸べる。

「ごめん」

美羽は赤くなった顔でそう言うと、僕の手を取って起き上がった。僕が怒っているのか気になっているのか、上目づかいに見つめてくる。

「今の、全部見てたの？」

僕が言うと、美羽は萎れた顔をして、しょんぼりと頭をうなずかせる。三つ編みがぶらりと力なく垂れている。

「よっちゃんがヒロのこと好きなの、ずっと知ってたんだ、あたし」

美羽は、ぼんやりとよっちゃんの去っていった方向へ視線を向ける。

「ヒロは私のこと好きなの？」

美羽が突然、言った。僕は顔を真っ赤にして、しどろもどろになって、「何言ってるんだよ、美羽」とつぶやく。

「私だって、ヒロのこと好きだもん」

美羽がさらっと、気にした風もなくそう言った。僕はもう頭から湯気が立ち上るくらい真っ赤っかになって、口をぱくぱくと開閉させる。

「ヒロってそういうところ鈍いから、こっちから言わないと、いつまで経っても気付いてくれそうにないんだもん」

美羽は、んもう、と腰に両手を当てて溜息を吐く。

「美羽は、よくそういう恥ずかしいことが言えるよな」

やっと口にできた言葉がそれだった。

「だってヒロになら、こういうこともさらっと言えちゃうんだもん」
美羽はけらけら笑って自分の三つ編みの髪を弄ぶ。

「ヒロはどうなの？ 私のこと好き？」

僕はそう訊かれて、顔を伏せた。

「わからないんだ」

美羽は僕の顔を下から覗き込むように、「わからない?」とつぶやく。

「そう、わからない。美羽っていつも一緒にいたから、好きだって言ってもどいう意味で好きなのか、判断しにくいんだ」

「いいじゃん、そんな細かいこと気にしなくても。好きって言うのなら、それがどんな感情から来てるかなんか気にしなくても良いんだよ」

美羽が歩き出したので、僕も彼女に続く。

「僕って結構モテるんだな」

ぼつりと口になると、美羽がにこやかに笑いながら振り返る。

「だってヒロは顔も綺麗だし、背もそこそこだし、性格も優しいし、女の子に意外に人気なんだよ」

はじめて知った、そんなこと。

「一番近くにいる私が保証するわ。ヒロは良い男よ」

ありがと、と僕は美羽に笑いかけた。

僕は美羽の家の前まで来ると、美羽に「それじゃあ」と手を上げる。

「お返事は?」

美羽は口を尖らせて言う。

「またいつか、じゃダメ?」

美羽はうーん、と頬に人差し指を当てて宙を仰ぎ、

「いいけど。何年後よ」

そう訊いた。

「わからない。もしかしたら死ぬまで来ないかもしれないよ」

僕がそう苦笑して言うと、美羽は三つ編みをびよこんと跳ねさせて大きくうなずき、

「それでも良いよ。ヒロがお返事くれるまで私ずっと待ってる」

そう言って、美羽は手を振り返して、家の中に入ってしまった。

僕は美羽の背中を見送ると、はあ、と息を吐いて歩き出す。

何年後かはわからないけど、いつか美羽のこと、好きってはずき

りと言えるようになれるのかな。

僕はふっと笑って、美羽の家の隣にある自分の家の門扉を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264j/>

三つ編みミウと、きれいなよっちゃん

2011年10月5日02時34分発行